

# 南方（ビルマ）

## 独立輜重兵第二連隊

### ビルマ作戦に生き抜く

香川県 原 田 幸 雄

私は、支那事変の南支那広東攻略のためのバイパス、  
湾奇襲上陸には軍属で参加。大東亜戦争後期のビルマ、  
インパール撤退作戦に参加、我が小隊の補充兵十八人  
中ただ一人、奇跡的な生還をすることが出来ました。  
これは、少年の時から家庭教育と申すか、生活環境  
のお陰と、出征中家族や親族全員が私の生還を祈り続  
けたことが神仏に通じたためと確信しています。

私の父雪次は、明治十八年生まれで、明治三十八年

兵隊検査を受けて甲種合格でした。昔の木田郡井戸村  
からただ一名、丸亀歩兵第十二連隊に、日露戦争後の  
軍律厳しい明治三十九年一月十日現役兵として入営し  
ました。二年で満期除隊し、自分にも厳しいが、家でも  
厳格で几帳面の短気者で、私たちはそんな父に育て  
られました。

私は大正九年九月十六日生まれですが、生家の集落  
は大正の初期は二十二戸。山あいでも東西に開け朝日を  
受けて大きな谷が二谷と、小さな谷が七谷からなっ  
ている。谷の南側と北側の三尺（一メートル）余りの道  
が集落の道で、西に峠、南にも岡の峠があります。東  
には国下池（水面積十町歩＝十ヘクタール）という池  
がある山村の集落でした。

田では米と麦、畑は桑園と一部果樹、我が家は七反

五畝余の田と畑三反余を耕作していました。畑は桑畑で一年に四、五回蚕を飼っており、子供の時から桑の葉摘みをさせられました。夏の夕方蚊に刺され、五つ年上の姉と二人が、畑で泣いたこともあります。

家にはまだ電気が来ていなかったからランプ、提灯が明かりでした。下に妹三人、第一人の二男四女の六人兄弟姉妹ですが、弟妹達はまだ幼いから家で遊んでいます。私は家に帰り風呂の水入れと風呂炊きによく使われました。六十年余の昔のことですが、今思うとその苦勞が良い教えでありました。

姉が井戸尋常高等小学校六年生の時に私は一年生入学、姉に手を引かれ片道半里余り(約二キロ)の通学道を、時には姉が母の手伝いをされるとそれを待つので、小学校まで何度か走っていったこともありましたが、二年生になってからは雨降りの日以外は弁当は持たず、昼食に往復一里余(四キロ)の道を家まで走っての行き帰りでした。私は坂道を走り上がり、昼食が済むと駆け下り走って学校までです。

昭和七年小学校を卒業し井戸青年学校に入学、昭和

十六年三月二十五日、青年学校研究科二年を卒業する。青年学校在学中の十九歳の年、八月に軍属の募集があり志願し合格しました。

昭和十三年九月二十三日、家を出発、二十四日午前十時、広島県宇品港杉山部隊に入り、因島で一週間教育を受けました。九月三十日午後一時頃輸送船に乗船、宇品出航。十月十七日朝十時頃、南支那バイヤス湾に上陸、荷揚げ作業を一週間程して船に乗り広東に行き、十二月黄甫港岸壁の兵舎に入り、更に荷揚げ作業をしました。

昭和十四年春、病気になる、内地に帰り軍属を解かれ家に帰り青年学校に復学、昭和十五年四月一日付で井戸村長より井戸消防団員を命ぜられました。農業をしながら井戸産業組合加工部に勤める(現在の農協)。昭和十五年六月二十日、兵隊検査を受けたが身長一メートル五十二センチ、体重四十七キロ、健康でした。が第三乙種合格でした。

昭和十七年一月二十三日、徴用工員を命ぜられ、兵庫庫上久代、大阪機工株式会社猪名川工場に入社しま

したが、戦争は厳しくなり、若い男は軍隊に入隊しました。

昭和十七年五月十七日付で私も教育召集を受け、善通寺の輜重連隊、騎馬隊に入隊し、馬の扱い方を教えられました。荷を馬に載せての行軍訓練、水馬教練も受けました。入隊三日目に善通寺練兵場へ教練に行き、小休止のとき、分隊長が「煙草を吸う者は手を挙げろ」といわれました。私は正直に一番に手を挙げましたが、他の人は誰も挙げず、私だけが分隊長から「原田二等兵は本日只今より煙草を喫ってもよろしい」と喫煙を認められました。その時の煙草の味は今も忘れられません。

初めての日曜日に舎内休暇があり、分隊長は午前八時過ぎ外出しました。班内は兵隊だけ三十一名いたが、誰となく煙草を喫い出しました。午後五時前、分隊長が帰り、班内に入るなり「誰がこんなに煙草を喫ったか、全員廊下に整列」という。皆向かい合いになっただ、右側一番の兵のビンタを叩き「軍隊のビンタはこういう要領だ。ビンタ始め」と言っておいて私は分

隊長に呼ばれました。

班内に入ると「原田、何故皆が煙草を喫うのを止めさせなかったか」といわれましたが「私には止める権限はありません」とはっきりいいました。分隊長は「よろしい」と言い、全員夕食を食べることを許され、全員班内に入り、分隊長に謝りました。全員、美味しく煙草を喫っていました。

馬は甘い物が好きと聞いていたので、私は氷砂糖を持って行って馬にやりました。それから撫でてやり馬に安心感を与えてから、次のことをすると、何時も馬は懐いてくれました。

善通寺から高松一泊の演習に出発の時「原田二等兵、この馬を引き出し荷物を積み」との命令で、馬を見たら赤色の布が尻尾とたてがみに結び付けてある。「この馬は癖馬だから気を付けよ」といわれましたが、命令ですから「ハイ」と言って、ポケットから氷砂糖を出し馬に与え「ドウドウ」といって安心させ、馬を引き出し荷物を積み出発をしました。馬は道中も温和しく、一泊演習も終わりました。

後に聞いたのですが、暴れ馬だといって兵隊が馬を見たら叩くので、馬は人を見ると噛む蹴るの、手がつけられない癖馬になったのだそうです。私は除隊するまで馬の手入れをしてやり、除隊の朝お別れの大好物の甘あん入りの餅を買って持って行き馬に食べさせ、「これから後は暴れずに兵隊に大事にしてもらえ」といって撫ぜながら馬と別れました。召集解除後、その馬はどうなったか知りませんが、人も馬も愛情をかけてやるのが大切だと判りました。野戦では徒歩小隊に入隊したため馬を連れる機会はなかったのです。

昭和十八年十月十八日午前十時、南方要員として善通寺連隊に召集入隊。二十三日午前三時十分汽車に乗りました。それから私の野戦生活が始まったのです。九州小倉港で軍用船に乗り、上海（二十日間宿舎で泊）、高雄、仏領印度支那、十二月二十四日泰バンコク、昭和十九年一月一日、バンボンで本隊を追及、三日から行軍、泰緬国境を過ぎ、三月マンダレーに集結、北部アラン作戦に参加しました。

昭和十九年十二月二十四日、マンダレー集結。二十

年一月ラシオ作戦参加、三月カラトング街道九十二マイルで警備につきました。昭和二十年八月十五日九十二マイル地点で終戦を聞きました。中隊に帰り、泰のチェンマイを通過、バンコクに昭和二十一年五月二十日頃着き、六月十三日バンコク乗船、六月二十四日横須賀連隊に帰り、二十七日召集解除、復員しました。

これが戦地における私の略歴ですが、次にその間の戦地における行動を述べてみます。私は輜重兵といっても、騎馬部隊を護衛する徒歩小隊（三個分隊）の一分隊に入りましたが、編成完結は一月三日でした。サンジャックを出発し、泰緬線を行軍と無蓋貨車による列車輸送で、一時間に二十キロぐらいしか走りません。薪を焚いて走るが、途中空襲があると行軍した方が速いくらいです。

昭和十九年二月中旬、モールメン、マンダレーに集結した。インパール作戦が開始されていて、インド領コヒマ（インパールの北約百キロ）輸送は、コヒマ盆地のソラムーガテヤム間を山砲の砲弾や糧秣を夜間徒歩で運びました。コヒマから十八マイル（一マイルは

千六百九メートル)ですから約三十キロ手前で輸送勤務をし、チドウィン河を渡ったのは大分上流だったのです。

馬が使えないから徒歩の輜重隊です。しかも、制空権は連合軍に握られているから夜行軍である。コヒマへ行く途中昼間に三回の空襲を受けましたので夜行軍です。往復六キロ行程の山道と崖の縁を全部徒歩です。

四月頃、山奥の道を迂回していたら敵に見付けられました。私は当日は後方警備をしており小休止中敵襲を受けました。指揮班等の兵隊十三人と馬八頭がやられました。前兵の徒歩小隊は部隊を守らなければならぬので、我々後兵に「第一分隊前へ」の号令があり、負傷者などを全部担架に乗せ、十二キロの輸送をしました。十三名の兵を担送するには二十六名必要で、我々の分隊三十一名だから分隊長や助教以外は皆負傷者の担架輸送です。

その間の食物といったら川の魚を捕ったり、名もない野草の葉を食べていた。コヒマへ着いた後も糧秣は全然来ない。そのため現地徴発以外方法がなかった。

輸送されたのは山砲弾と手榴弾で、糧秣はほとんどない。しかも、後方の兵隊はやられて、現地民間人の背中に積んで来る。兵隊は鉄砲担いで一時間六キロ歩く汗を流しながらついて行く。私は歩兵銃を持って、体は大丈夫で勤務は充分に勤めた。

八月頃だったが、三中隊から送って来た荷物を担いで五十メートルぐらいの道を夜間登って集積地へ降ろす作業をしていました。その時、後の兵が降ろした山砲弾の箱(三十キロ)の角が私の口へ当たり、前歯四本全部が中へ倒れ込んでしまったのです。出血がはげしいので、指先を突っ込んで歯を引き出し、宿営地の医務室に行ったら、衛生兵が「原田、薬は何もない」と、馬につける沃度チンキを塗られました。飛び上がる程痛かったが我慢し、一週間程練兵休(作業や訓練を休む)をもらい、大体痛みも止まり落ち着いたので、また勤務につきました。

八月末から、ついに反転作戦となりました。コヒマ盆地は連合軍にやられ、インパール作戦は失敗し撤退である。その場所は忘れましたが、正規の道は通れな

いので山間の獣道(間道)を通り、「カンコ」(我が隊の目印で赤い鉛筆で書いた矢印が付いている)の道しるべを見ながら下った。その時期は雨期になり道路は水没しているので山の屋根を歩きました。

九月から十月頃か、一か月間滞在し、「独立輜兵第二連隊第二中隊は戦没者遺体を収集せよ」の命令を受けました。約一か月間、毎日死体を収容しました。各小隊はそれぞれ勤務に付き、各分隊から兵を出すのですが、我が分隊は三十一名が十七、八名になってしまっていた。

死体収容は二人一組となり一死体を担架に乗せて収容します。幅二間(三・六メートル)余り、長さ四〜五間(七〜九メートル)、深さ八尺(二メートル半ぐらい)の壕を使役を使って掘りました。私の中隊は二百名ぐらいいたが、一日交替で百名ぐらいずつ出て五キロぐらいの所まで歩いて死体を収容したのです。

独歩患者や撤退者は夜着いた時はちゃんとしているが、雨しのぎの屋根の下や、故障したトラックの運転台に入り、死んでいる。皆、飲まず食わず、栄養失調

なので「兵站へ行け」というが、今晚はこういう良い所があると安心し、ここでゆっくり出来るという気持ちになるでしょう。はなはだしい人は、トラックの運転台のドアを開けて寄りかかり、へばり着くようにして息を引き取った兵隊もいました。

それらの人たちを全部担架に乗せ四人で持つていくのですが、我々も食う物を食べていない。約一か月間いて死体を収容しました。壕の中に入れて寝かせ、一人ずつひと並べにして、翌日は収容してきた死体をその上に並べます。

収容所のことですが、毎日七、八十名ぐらい収容したと思う。昭和十九年後半からビルマ反転作戦をしている。白骨街道は雨季街道という。雨が降っても通れる道があった。先程書いた山の背の高台の道である。死体の収容場所は一寸低めの所に掘った壕である。アキャブとか、マンダレーまで下る一か月間収容作業したわけです。人数にしたたら、合計五千体を収容したでしょう。そうしているうち「下がれ(撤退)」という命令がきました。

マンダレーまで下がるのには、チンドウィン河を渡るので、十一月上旬の、雨季で水かさが増し、かつ上流なので曲がりくねっているため、同じ河を一日に十八回も渡ったことがあります。そのようにしてマンダレーに着いたのは昭和十九年十二月二十四日であつたと思います。

昭和二十年になり、一月四日「ラシオ作戦に参加せよ」との命令が下つた。その時は、もう馬全部を山砲の白石部隊に渡してしまつていたため、後は徒歩輜重ではなく、任務は歩兵と同じになりました。その後、イラワジの手前のインドウヤ、マンダレーの北東二百キロ余のラシオで戦闘があり、私も功労章を頂きました。

終戦はモーチ街道九十二マイル地点だつた。中隊は八十二マイル地点にいた。我が分隊三十一名は十三名になつたが、そのうち古参兵が十二名、十八年の補充兵である私の同年兵十八名中、生き残つたのは私一人だけでした。

「反転作戦を開始してからは印度の国民軍とビルマの

防衛軍は、寝返つて我が軍を徹底的に叩いて来た。しかも、その兵器や弾薬は彼等に貸していたものだった。このような体験を何ほ話しても、書いても尽きない。それは、自分でも情けのうて涙が出ます。そのために戦死者が余計出ているからです。

終戦後はイギリスの管理下におかれ、使役は薪の伐採や、作製、運搬でした。パンコクから出航したのは昭和二十一年六月十三日であつた。ビルマではたびたび遺骨収集が行われているが、まだ何万人かの戦友が異国の地に眠っておられる。

六月二十九日朝、家に着きました。野戦から家に使役を出しましたが、家にも親戚にも一枚も着いていませんでした。家に帰る途中で父親に道の四つ辻で逢つた。「お父さん幸雄が帰つて来たぜ」と言う。父は私の体を上から下まで見てから何も言わず私の眼を見て、大粒の涙をこぼし、暫くは何も言いませんでした。「幸雄良かった。元気で帰つて来てくれたのう、家に帰つて休んでおれ、父は本家へ行ってくる」と言いました。

家に帰ると姉が田植の手伝いに来ていました。妹は私の顔を見忘れ、姉に「早く来てよ、何処かの人が来たわ」と言いながら台所へ行きました。私が「只今」と言つて家に入ると姉が出て来て「幸雄さん、お帰りなさい」と言いながら母を田へ呼びに行きました。

母も帰り、私の顔を見るなり「幸雄さん長い間ご苦労さん」と言つて座敷に上がり、仏様のお灯明をともし「ご先祖様、お陰で幸雄が元気で無事に帰つて来ました」と目に涙を浮かべ、「幸雄よ、着物を着替えて、ご先祖様に無事に帰つたことを報告してお参りしなさい」と言われた時に、私は初めて我が家に帰つたと嬉し涙にくれながらお線香をまつり、お参りしてから横を見ると私の写真が額に入れてありました。その前に陰膳が付けてあります。膳には朝の食事が付けてありました。味噌汁、ご飯、お茶も供えてあります。それを見た時に、野戦でいくら食べる物が無くて、ひもじくても我慢が出来たのは、母が私をひもじいことがないように、毎日三回必ず陰膳を上げてくれたお陰だとよく判りました。

父も帰り、父母姉妹私と五人が昼食をとりながら母が私に「今何が一番欲しいか」言いなさいと言うので、私は「麦の飯の炊きたてが欲しい」と言いますと、父は笑いながら「百姓の子は麦飯が一番健康の元だ」と言つて大笑いしました。夕食の時、私の分だけ特別に炊いてくれ、熱々の麦飯に漬物で腹一杯食べ「我が家は良いなあ」と思いました。

夕食後いろいろな話が出て、父が六月二十四日に晩寝ていたら、母が跳び起き「お父さん幸雄が帰つた」と起こされたので外に出てみても何も見えないから、母に「夢を見たのだろう」と言うと母は「幸雄は日本の国の何処かに帰つて来ている」と言つたとのこと。二十四日というと私が横須賀に上陸した晩。母に、夢見で知らせたのだと思います。

六月三十日、本家や隣の伯父の家に行き、仏様をお参りし、村役場に帰国の届けを済まし、母の里の墓参りをし、伯父母、従兄夫婦に挨拶をしました。その時伯母の話では、八十七歳の祖母が毎日「私と従兄が無事帰国出来ますようにと、自分の命に代え、往復半里

の道のりを雨の日も風の日も、一日も休まず日参をしてくれた」とのことでした。私は嬉し涙にむせびました。伯母が「今日は雨風がきついから、家からお参りするよう」と言うが、「私が八幡様へお参りすることぐらい何ですか。正義や幸雄を遠い他国へ行っているその苦勞を思えば」と言って、蓑笠を着て死ぬ一週間前まで八幡様にお参りしてくれたとのことでした。

昭和二十年一月に亡くなりましたとのこと。私も仏様にお参りし、お祖母様に心から元気で帰国出来たことを報告し、昼食後鎮守の八幡様にお参りをし帰宅しました。七月一日、母の姉、伯母の所の仏様にお参りをし色々な話をしている間に、好物のうどんを伯母と姉が打ってくれ、伯母、姉、従兄など一家と楽しい一日を過ごし、一泊し帰宅しました。

このように、家族、祖母、伯父母に従兄等一族の方々が、私の生還を毎日神仏に祈ってくれたお陰で帰国出来たことと、つくづく感謝したのです。

また、戦地で耐え忍べた精神力と体力は父の鍛練と少年時代から家業に精を出したお陰だと思っています。

私が小学校を卒業してからは農業を手伝い、薬工品錠打ちをしました。夏の小麦を家に担いで帰る父が上り坂を帰る時、一生懸命に速く走って帰るように教えられ、体を鍛えたお陰で、軍隊へ行った時も、行軍は誰にも負けませんでした。野戦における時「行軍力抜群」で連隊長より表彰を受けたのも、少年の時の鍛練のためでした。

その表彰状は、昭和二十一年三月英軍に武装解除された時、背のうに入れてあったものを「兵隊サン、コンナモノイラナイ」と言って、目の前でバリバリと破られました。この時は山本古兵と二人で涙が止めどなく流れました。山本サンは「原田、戦争に負けたのだから仕方が無い」と言って二人で慰め合いました。今でも戦友会の時、山本サンとこの話をして悔しがっています。

また、私を結果的には鍛えたことがあります。小学校五年の秋、父が病気になる牛を使うのに困りました。日曜日の朝、母が「幸雄、今日はお天気が良いから麦地を耕すから牛を使いなさい」と言われ鋤、鍬を持つ

て田圃へ行きました。母は牛に鋤を付け田へ来ました。私の地方では女は牛を使うと汚れるといって「幸雄は男だから」と敵立てから、鋤筋を教えてくれ、五年生の私が牛の使い方を母に教わったのです。その時、私の母は何でも出来る人だと思い、良い父母を持ち嬉しく思いました。

そのような思い出を懐かしく思いつつ、今でも感謝の気持ちで一杯です。その母も他界してから三十年になります。父が他界し二十六年です。母は六十九歳、父は八十四歳。その子の私も九月十六日には七十三歳になります。

復員し帰宅した翌二十二年一月三日結婚、また命により農地改良補助員を二年間勤め、香川県知事より感謝状を受けました。昭和三十年米作作品品評会で二等賞、出来高最高位をとりました。四十五年間、中農の生活をするため朝星、夜星、月の明かりで農作業に専念し、今は二世に譲っての生活です。

現在の私の家族は私共夫婦に若夫婦、小学校二年生の孫娘と五人家族です。昭和五十六年四月から恩給欠

格者連盟の三木支部長として会員のお世話をさせて頂いております。私は浄土真宗の家に生まれたお陰で、子供の時から父母に仏様にお参りするよう教えられ、信仰をしており先祖に感謝しております。人の一生は長いようで短いものですが、私は先に述べたように、敷しい家庭で育って強健な肉体と精神力を頂きました。またお互いに思いやる心をもって家庭愛が築かれ、軍隊生活でも戦友助け合って生き残れました。そして留守家族や親族の人達が神仏に祈り続けたからこそ私の生還と私の今日があります。

私の財産は、昭和十五年二月、支那事変における功により、金六拾圓を賜った国庫債券と、従軍記章（昭和十三年に軍属として行った功により賜）と、百姓をしながら頂いた表彰状、感謝状です。それにかげ替えない家族や友人です。

#### 〔付 記〕

私は先に書いたように、昭和十八年十月十八日召集になった。平成五年十月十八日で満五十年。だから、日時や場所は中々思い出せない。召集になり半世紀、

その日、娘が鯛の尾頭付で祝ってくれました。一口に五十年といいますが永いもの、大正九年九月十六日誕生だから満七十三歳です。有り難いことです。合掌。

### 【解 説】

執筆者・原田幸雄さんの本文前編にはその生い立ちと父君の教育や家業手伝いにより、心身を鍛練し、困苦欠乏に耐えうる不屈な精神力と強靱な体力をもってビルマ戦線（インパール作戦初期より撤退まで）で生還した。また留守家族の敬虔な信仰心がこれを支えたものと思う。

所属した独立輜重兵第二連隊の公的資料により、その戦歴を列記する。

昭和十五年三月十五日、中華民国湖北省武昌において編成完結。連隊長陸軍中佐折田義一。（編成時、隊員出身地は一都一府二十九県）。以後十七年十月二十四日まで中華民国湖北省

当陽県宜昌、河溶鎮にありて支那事変並びに大東亜戦争支那方面戦役に従事。

昭和十七年十月二十四日より、「ビスマルク」諸島「ニューブリテン島」へ転進のため輸送業務。

昭和十八年八月十六日〜九月一日、南太平洋における

「ココボ」地区兵站業務並びに警備に従事。

同年九月一日〜十六日、南西方面へ転進のため輸送業務。

同年十月七日〜十二月二十六日「シンガポール」に在りて、「ウ」号作戦参加のため準備。「ウ」号作戦参加のため「シンガポール」で待機。

\*「ウ」号作戦とは「インパール」作戦の防諜名

昭和十九年二月十六日〜十一月二十七日「ウ」号作戦及次期作戦移行のための作戦並盤作戦に参加、その間ビルマ国「マングレー」〜印度「アッサム州」「カラサム」州同「ウクル」〜同「フミネ」―「ビルマ国ヒンレブ」―同「マングレー」間において行動。

同年十一月二十七日 陸軍中佐隊部一連隊長に補せらる。

同年十一月二十八日〜昭和二十年八月十四日断作戦二、三、四期及克作戦に参加、その間、ビルマ国北

「シャン」州―「モニナイ」州「カレンテ」州「南  
シャン」において行動。

昭和二十年五月二十五日 陸軍中佐乾稻福平連隊長に  
補せらる。

同年八月十五日 終戦

同年十月 シヤム国「チコンナヨーク」集結。

昭和二十一年五月十八日「チコンナヨーク」出発。

同年六月四日 「バンコック」において乗船。

作戦、勤務、行動の概要〔死傷損耗〕

昭和十五年四月二十九日〜七月三十一日、宜昌作戦、

部隊は第三師団及第一野戦輸送司令部に配属され、

信陽―泌陽―東陽―当陽―河溶鎮に在りて被属部隊

に対する輸送及補給に任ず（第一軍軍司令官より

感状を付与さる）〔損耗九名〕

昭和十六年一月七日 予南作戦 武昌―信陽―汝南―

信陽間 第四十師団に対する輸送補給業務に従事す。

同年二月〜三月 漢水作戦 独立混成旅団に対する輸

送補給に任ず。

同年八月〜十月 第一次長沙作戦 旧口鎮―岳州―金

井―岳州間 第四十師団に対する輸送、補給に任ず。

〔損耗五名〕

同年八月一日〜八月四日 浙北作戦 沙市対岸に於け

る戦闘に参加（第一野戦輸送司令部より賞詞を授

与さる）〔損耗十四名〕

同年十二月十八日 第二次長沙作戦 岳州―長沙―岳

州 第四十師団に対する輸送補給業務に従事〔損耗

三名〕

昭和十七年十一月二十七日〜同十八年八月三十一日

南太平洋戦「ビスマルク」諸島「ニューブリテン」

島「ココボ」に在りて「ココボ」地区兵站業務

「ニューブリテン」島北部地方に対する輸送補給及

警備に任ず。

昭和十九年二月十六日 「ウ」号作戦及次期作戦移行

への為の作戦並びに盤作戦 ビルマ国「マンダ

レー」インド「アッサム」州「カラサム」―同

「フミネ」ビルマ国「マンダレー」間に在りて第五

師団及第六師団竹原支隊に対する輸送並びに補給に

任ず〔損耗五百三十三名〕

同年十一月二十一日〜二十年八月十四日 断作戰第二

・三・四期 克作戰 ビルマ国「北ジャン」州「モンナイ」州「カレンキー」州「南ジャン」州に在りて第三十三軍隷下指揮部隊に対する補給及同州警備に任ず〔損耗十三名〕

―終戦より帰還までの行動―

終戦後シャム国「チェンマイ」集結のためビルマ国「南ジャン」州「モウチ」―「ケマビユー」―「メセマテ」―「チョンベニ」間患者の後送並糧秣の輸送に任しつゝ転進。

二十年十月 シャム国「ロンキョウ」に連隊本部一部及び三個中隊集結完了す連隊長以下百三十名（本部主力及び一個中隊）は「クンヤム」地区業務処理のため「クンヤム」に残留、爾後「トングー」方面に転進するも連絡不能。

同年十月十六日 「ロンキョー」出発「ラーヘン」―「サクンサワン」―「ノ・ホイ」を経て、十月十九日盤谷北方「ナコンナヨーク」西端村に集結。

二十一年五月十八日 同地出発 六月二日 盤谷新

生キャンプ到着

同年六月四日 盤谷に於いて乗船 同五日 出帆  
同十九日 浦賀着 同二十五日 上陸 同二十七日 横須賀 援護所において仮復員。

―指揮隷属関係及その変遷―

昭和十五、三、十五〜同十七、十、二十四、第一野戦

輸送司令部隷下

同年十、二十五〜十一、三十 第十七軍

同十七年十二、一〜十八、八、二十一 第八方面軍

同年九、一〜十、六 南方軍直轄

同十、七〜十九年一、第十五軍隷下

同一、〜同四、二十八、第二野戦輸送司令部隷下

同四、二十九〜二十一年六、二十七、第三十三軍隷下

―独立輜重兵第二連隊戦友会資料による行動概要―

昭和十九年

二月初旬 モールメン。二月中旬 マンダレー集結。

三月中旬 ナーピン附近。三月下旬 ホマリン、チ

ンドウイン河渡河。四月中旬 ソムラ、チャラオ附

近。五月〜七月 チャラオ、カラム、コンガイ附

近。七月下旬〜八月上・中旬 ウクルル、フミネ、  
タナン、ショジクト、トンへ附近。八月下旬 トン  
へ、アロー、ヘロー、チンドウ河渡河。八月下旬〜  
九、十、十一月 ワヨンゴン、ピンレブ、マンダ  
レー附近。

昭和二十年

一月〜四月 シボー、ランキ、モンギヤイ。五月中  
旬 ホーボン附近。五月下旬〜八月 チマピユ、  
モーチ、ナタン附近。九月 クンヤム。十二月  
ナコンナヨーク集結。

昭和二十一年

六月 バンコック乗船。七月クランゲン乗船

## 一兵士のビルマ雲南戦記

佐賀県 岸 川 力 蔵

戦火燃え盛る昭和十七年四月、教育召集令状により  
久留米西部第四十八部隊第一機関銃中隊に入隊、約三

か月間の猛特訓を受け、訓練終了後直ちに臨時召集に  
切り換えられると予想していたが、召集解除となった。

佐世保海軍廠物資部に再就職、昭和十八年九月臨時  
召集令状を受けた。いよいよ戦地行きかと思ひ緊張の  
中に覚悟を決めて久留米西部第四十八部隊の営門をく  
ぐり、連隊本部横の武道場に「龍」「菊」部隊要員が満  
員すし詰めの状態で宿泊、一か月間の猛訓練を受けた。  
十月中旬ごろビルマ派遣要員として出発命令を受けた。  
歩兵第四十八部隊は営門を出るにあたってもラッパ  
吹奏もなく粛々として隊列をととのえ行進していった。  
部隊は久留米市明善中学校校庭に集結した。整列を  
終えると闇夜の中に人影が多数近付いてきた。出征者  
の家族である。我々補充要員二百名の半数は妻子の  
ある人達である。部隊長の心温まる計らいで極秘のう  
ちに最後の別れの機会を与えてくれたのである。  
私は当時独身であったがこれが今生の別れになると  
思えば目がしらが熱くなって、胸に火を焚くよううで  
あった。妻や子供達と別れてゆく人はその哀惜の情如  
何ばかりと察するに余りあるものがあつた。